

長崎県南高来郡吾妻町方言における 身体感覚を表すオノマトペ

愛宕八郎康隆

○はじめに

1. 調査対象地

島原半島北西部に位置し、果樹栽培（蜜柑・梨・キューイの他にいちご）を主に、米作、畜産（乳牛・肉牛・豚）や野菜作り（馬鈴薯・玉葱・キャベツ・茄子・甘藷）を生業としている。交通は、島原鉄道便が日に16往復、バス便が20往復あり、交通の便に恵まれている。人口は8233人（男3971人、女4252人）、世帯数は2073世帯である。

2. 調査年月日 平成3年8月28日

3. 話者 清水典子(シズ ノリ) 昭和3.8.27生、（他に、岩永みつよ 昭和3.12.11生、植木すみえ 昭和2.6.12生にも同席してもらった。）

4. 調査者・調査場所 愛宕八郎康隆・清水典子宅座敷の間

5. 調査方法・調査時の様子

調査の方法は、被調査者清水典子に、調査票（所定）に基づいて尋ねる方法をとった。必要に応じて、同席者（前掲）2名にも発言を求めたり、確かめたりした。調査現場の雰囲気はうちとけていてオノマトペの調査にふさわしかった。

I 全身の感覚

1-1. 快不快

「サッパリ」、「スーッ」、「スカッ」があるが、「サッパリ」より「スーッ」・「スカッ」の方をよく使う。その場合、

○スーッ ナッター。さっぱりした。

○スカッ ナッター。さっぱりした。

のように表現する。

1-2. 寒さ

「ガタガター」、「下ゴ下ゴ」、「ズンズン」などがある。

○ギャーケノ チータトヤロー。セチカン 下ゴドゴシター。風邪をひいたの
だろう。背中がぞくぞくして。

○セチカン ズンズン スッ ネー。背中がぞくぞくするねえ。

「ズンズン」より「下ゴ下ゴ」の方が程度が強い。

1-3. 熱さ

「ボカボカ」、「クッカ」などがある。

○クッカ ヌクモッテ キター。（体が）かっか暖まってきた。

II 皮膚の感覚

「ピリピリ」、「ベタベタ」、「ジックリ」、「ジュックン」、「ムズムズ」、「バサバサ」、「スベスベ」、「ツルツル」、「ズキズキ」、「ズグズク」、「ヒリヒリ」、「ヒリーヒリ」、「ヒリヒリヒリヒリ」、「ズークズク」などがある。

海水浴での日焼けの場合は、「ピリピリスル」を用い、「べたべた」は通常、

○アシェデ ジックリ (ジュックン) ナッター。汗でべたべたになった。と表現する。「バサバサ」はひびが切れて油気のなくなった状態などを「バサバサ ナツトル。」と表現する。「ずきずき」は、「ズグズク」の形で、

○ズグズク ウジータ。ずきずきうずいた。と表現される。また、「ヒリーヒリ」は、「ヒリヒリ」に比べて、痛みの度合いが弱い場合に用いられる。「ヒリヒリヒリヒリ」は痛みのしつこさを表わす。「ズークズク」は、できものが化膿しかけた時の痛みを表わす

Ⅲ 頭部の感覚

3-1. 頭

「グーングン」、「フラーフラ」、「グラーングラン」は、それぞれ共通語の「がんがん」「くらくら」に当たるが、「グラーングラン」は、頭部全体が熱くひどく痛む時に用いる。

○キューワ アタマン グラーングラン スッ。今日は頭がぐらぐらする。なお、「キリキリ」は、頭の一部が局所的に鋭く痛む時に用いる。

3-2. 顔面

共通語の「かっか」に当たる表現は、

○ツラン カッカ ナッタシェン。顔がかっかとなったから。のほかに、「カート」も使われる。

○ツラン カート ナッタシェン。顔がかっとなったから。これらのほかに、「ボート」が、

○ボート ナッテ カンガエノ ウカバン。(頭が) ぼーっとなって考えが浮かばない。

のように用いられるが、これは顔面の状況ではなく、頭が上気する様を表わす。

3-3. 目

「チカチカ」、「チカーチカ」では、後者の方が、その度合いが少し弱くなる。「しょぼしょぼ」には、「ショボショボ」のほかに「ショボショボ」があるが、両者には表現差はないという。

「ごろごろ」は、当地も「ゴロゴロ」であるが「ごろごろ する」を「ゴロック」とも表現する。

3-4. 耳

「きーん」、「じーん」はなく、

○ミミン ガンガン スッ。耳ががんがんする。

のように、鼓膜にこたえるような響きの感覚を「ガ^ンガン」と表現する。

「じくじく」は「ジュク^クジュク^ク」と表現する。

3-5. 鼻

「むずむず」は、当地でも「ムズ^ムズ」で表現するが、この感覚をほかに、「モヤ^モヤ スッ」のように「モヤ^モヤ」でも表現する。「ぐじゅ^{じゅ}ぐじゅ^{じゅ}」に対応することばは見られない。

風邪をひいて鼻水の流れる様は、

○ハチ^ミズノ タラ^ラタラ ナガル^ッ。鼻水がたらたら流れる。

のように「タラ^ラタラ」と表現する。

「つーん」は当地でも「ツーン」である。

3-6. 口

(口全体)

「ねちゃ^ねねちゃ」に対応するのは、「ネバ^ネバ」で、ほかに、「ベタ^ベタ」が用いられ、「ベタ^ベタ スル」をベタ^ツツとも表現する。

(歯)

「がち^がち」は、当地では「ガタ^ガタ」、「かち^かち」は、次例のように、

○キュー^ウ カチ^カチ ユーゴ^ト ヒヤ^カッター。今日は(歯が)かちかちいうくらい寒かった。

のように用いられる。

「ずき^ずずき」は、当地では「ズク^クズク」と表現したり、「ズキ^キツキ」とも言う。

○ズキ^キツキ シット^ン イマン^ン ウチン^ン ハイ^シャン イコー。ずきずきしている今のうちに歯医者に行こう。

なお、「ちく^ちちく」は、虫にさされたような時に「チク^ク スッ」と言う。

(舌)

「ひり^ひひり」、「びり^びびり」は、当地でも「ヒリ^リヒリ」、「ピリ^リピリ」である。

3-7. 喉

「から^かから」は、当地でも「カラ^カカラ」であるが、「いが^いが」の副詞形は当地になく、「イエン^カカ」、「イエ^ガガカ(えぐい)などの形容詞形を用いる。

「ぜえ^ぜぜえ」は、当地では、痰の出そうな状態の時に用いる。「ひゅう^ひひゅう」は、風邪の時など、喉から出る音に使う。

○ノ^ドン ヒュー^ヒュー ニート^ッ。喉がひゅうひゅういっている。

IV 胴体の感覚

4-1. 肩

「こり^ここり」は、当地も同様「コリ^ココリ」。

4-2. 胸

「どき^どどき」は、当地も「ドキ^キドキ」、「どき^んどきん」、「どっき^んどっきん」、「とく^んとくん」、「とっく^んとっくん」などは、当地には見られない。ただ、

驚いた時の「ドキッ ト シタ」はよく使う。「きゅっと」は、当地では、
○ムネン ギューッ ト シメツケラルッゴタル。胸がぎゅっとしめつけられる
みたいだ。

のように「ギューッ ト」が用いられる。

「むかむか」は、当地も「ムカムカ」であるが、「ムカムカ スル」を通常、
「ムッ ケン スル」(吐き気がする)と表現する。

4-3. 腹

(空腹)

「ぐうぐう」は、当地も「グーグー」である。「ハラン ベコベコソ ナッター。」
とも言う。

(満腹)

「たぶたぶ」は、当地では、

○ハラソ ガブガブソ ナッター。腹ががぶがぶになった。
のように表現する。「ガブガブソ ナッタ」になると、満腹の度合をゆるやかに表現したことになると言う。

「ちゃぼちゃぼ」、「ちゃぶちゃぶ」などは、当地では言わない。「ばんばん」
は、当地でも「バンバン」と表現する。

(腹下し)

当地では、下痢にかかわるオノマトペが多彩である。

「ゴロゴロ」、「ゴローゴロ」(前者に比べて、度合がゆるやかな表現)、「ガラーガラ」、「グルグルー」などは、すべて下痢の前兆表現に用いられる。例えば、

○グルグル ユー ナンノ アタッタチャイロー。おなかがぐるぐるいう、
何かあたってのだろうか。
の「グルグル」は、下痢の前兆ということになる。下痢そのものは、「ピーピー」、
「シャーシャー」で表現する。

4-4. 胃

「しくしく」に当たるのは、「ニヤーニヤ」であるが、

○イア ニヤーニヤ シター。胃がじわじわ痛んできた。
のように、胃、腹(腸)などの鈍痛の場合に、このように言う。「じくじく」は聞かれない。「きりきり」は、当地でもよく、「キリキリ イタム」というふう
に用いられる。ひどい痛みの場合である。「チクチク」となると、刺すような鋭
い痛みを表現する。

4-5. 尻

「むずむず」は、当地でも「ムズムズ」で、

○ムズムズスル、ハヨ モドロ カイ。むずむずして居心地が悪い、早く帰
ろうか。
のように用いられる。

V 手足の感覚

(手)

「ぶるぶる」は、当地でも同じく、「ブルブル」である。

(足)

「がくがく」は、当地でも同じく、「ガクガク」であるが、当地の場合、疲労困憊の趣が強い。

(その他)

「ぬらっと」は、当地では「ヌル^ーット」と表現される。

○ヌル^ーット シテ キモチノ ワルカ。ぬらっとして気持が悪い。(潟地の感触)

VI 関節(骨)の感覚

「ごきごき」、「ぐきぐき」に当たるものは、当地には見られない。「ばきばき」に当たるものも見られないが、「ぼきぼき」は、「ボキ^ーボキ」である。このほかには、「ボキ^ーット」が、

○ソゲソ マグット ボキ^ーット オルッ ゴー。そんなに曲げるとぼきっと折れるよ。

のように用いられる。

○おわりに

以上、吾妻町方言のオノマトベを見てきて、いくつかの特徴傾向に触れてみたい。

当方言のオノマトベは、全体、「ムズムズ」、「バサバサ」、「スベスベ」、「ツルツル」、「ズキズキ」、「ヒリヒリ」、「チカチカ」などのように、4音節の畳語形式の事象が圧倒的に多く(全部で26事象)、アクセントも第2音節にあるのが多いのが特徴傾向とされよう。

その4音節の畳語形式の事象のなかには、次のようなペアを見せるものがある。

「ヒリヒリ」 → 「ヒリ^ーヒリ」

「チカチカ」 → 「チカ^ーチカ」

「ゴロゴロ」 → 「ゴロ^ーゴロ」

これらにあっては、長音を挟む方が、当該現象の度合のゆるやかさを表現する。

また、「ス^ーット」、「スカ^ーット」「ヌル^ーット」などの「ト」を従える語形のもは劣勢と見受けられる。

(あたご はちろうやすたか 長崎大学教育学部)